The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	漢字学研究会
Author(s)	佐藤, 信弥
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 13-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　夜号（総六十一号）平成二十七年十二月　一三―一四頁

〔研究会通信〕

漢字学研究会

佐藤信弥

当研究会は、佐藤武敏氏（大阪市立大学名誉教授）により殷周史研究会の名称で一九九五年に結成され、木村秀海・末次信行・村上幸造の三氏を中心メンバーとして、「殷卜辞中所見先公先王考」をはじめとする王国維の諸論考や、池田末利『殷虚書契後編釈文稿』、『穆天子伝』、馬承源『商周青銅器銘文選』など、甲骨・金文あるいは殷周史に関する文献の講読に取り組んできた。

二〇一二年四月より、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所所長（当時。現副所長）の加地伸行氏の御斡旋により同研究所の研究部門となり、漢字学研究会と名称を改めた。以後、白川静『金文通釈』の続編を作ることを課題とし、一九七〇年代末以後に発見・発表された新出金文の講読、その他甲骨・金文など中国の出土文献や古文字学に関する研究発表に取り組んでいる。例会は毎月一回（基本的に第三土曜日）キャンパスプラザ京都あるいは立命館大学大阪いばらきキャンパスにて開催されている。

当研究会では新出金文の講読を通じて会員が金文の識字に習熟すること、そして特に中国での新しい古文字学の研究成果を吸収することを目指している。中国では前世紀末以来の大量の戦国竹簡の発見を承け、それら竹簡などの戦国文字を利用して甲骨・金文の釈字や文章読解を行う手法が主流となっているが、日本ではそのような甲骨・金文研究における戦国文字の重要性が今なお充分に認識されておらず、甲骨・金文研究と戦国竹簡研究とが分離して行われているのが現状である。今後は当研究会での研究活動を通じて甲骨・金文研究と戦国竹簡研究との融合をはかっていくことにしたい。

そしてその新出金文講読やその他関連の研究成果を年刊誌『漢字学研究』にまとめている。最新の第三号は二〇一五年八月に刊行された。バックナンバーは東方書店（https://www.toho-shoten.co.jp/）で取り扱っているほか、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所のホームページ（http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html）にてPDFを閲覧・ダウンロードできる。同誌では会員や立命館大学の関係者のみならず、学外からも広く出土文献や古文字学に関する論考を募集している。投稿先は上記ホームページを参照。次号第四号の投稿受付締切は二〇一六年二月末である。（字数二四〇〇〇字程度まで、編集委員による査読あり。）

当初は関西学院大学教授（当時）の木村秀海氏が会長として研究会の運営にあたっていたが、木村氏が二〇一四年八月に逝去されたことにより、大形徹氏を代表として再出発することとなった。二〇一五年現在の主要会員（『漢字学研究』編集委員）は以下の通りである。

大形　徹（代表・大阪府立大学教授）
馬越靖史（幹事・立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員）
佐藤信弥（幹事・立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員）
末次信行（千里金蘭大学教授）
村上幸造（大阪工業大学教授）
松井嘉徳（京都女子大学教授）

このほか湯浅邦弘氏（大阪大学教授）、福田哲之氏（島根大学教授）、そして立命館大学の山田崇仁氏及び落合淳思氏など、京阪神の大学に所属する関連分野の若手研究者が参加し、毎回の出席者は十名前後である。最近は女性の会員も増えている。新入会員は随時募集しているので、活動内容に興味を持たれた方は筆者のメールアドレス（satoshin@sun-inet.or.jp）に御一報を。

2015年6月20日開催の例会より